

地方へひろがり、会津の各地でも連歌れんがの集りがさかんになってきました。

十三歳になった兼載けんさいは、一句を聞いて百句を作るといわれるほど、すぐれた連歌さいのうの才能をあらわすようになりました。

「このまま、この会津においておくには惜おしい子供だ。」

と、まわりの人々の間で評判ひょうばんになるくらいでした。

現在いまも七日町なぬかまちにある金剛寺こんごうじというお寺に、そのころ、興俊こうしゅんというお坊さんがいました。会津の連歌の集りの中心となるほどの人で、江戸を中心として活躍かつやくしていた心敬しんきやうという連歌の先生とも知りあいでした。

応仁元年おうにん（一四六七年）、十六歳になった兼載けんさいは、興俊に連れられて連歌の勉強べんきやうのため、江戸えどに出ることになりました。日本一の連歌の先生である心敬しんきやうについて連歌を学びはじめたのです。

そのころの江戸は、関東平野の中にある小さな町でしかありませんでした。